発掘調査報告展

土岐を掘る

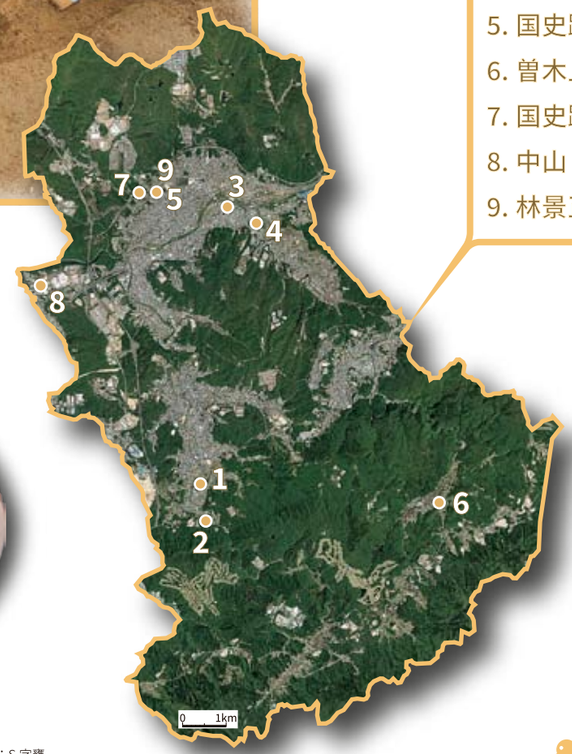
ご先祖さまの残したもの。

土岐市内には、現在 301 ヵ所の埋蔵文化財包蔵地、いわゆる遺跡があります。遺跡は、ご先祖さまの残したかけがえのない遺産なのですが、現代に生きる私たちが生活していくために必要な開発行為によって失われてしまうことがあります。このようにやむを得ず失われてしまう遺跡を可能な限り記録に残し、未来へと引き継いでいくために必要となるのが発掘調査です。本展では、土岐市内で近年に行われた多くの発掘調査の中から 9 ヵ所の遺跡を厳選して紹介いたします。

▲上林遺跡　調査風景

展示遺跡

1. 妻木平遺跡
2. 妻木城士屋敷跡
3. 浅野館跡
4. 上林遺跡
5. 国史跡乙塚古墳附段尻巻古墳
6. 曽木上田遺跡
7. 国史跡元屋敷陶器窯跡
8. 中山 1 号窯跡
9. 林景正氏窯跡



展示遺跡位置図

▲土師器：S 字甕
古墳時代　上林遺跡

▲須恵器：長頸瓶
奈良時代　妻木平遺跡

6 曽木上田遺跡

曽木町字村上

平成 29 年に初調査が行われました。建物跡等は発見されませんでしたが、小川の跡から東濃地区で初めて奈良時代初頭頃の「暗文土器」が出土したことが注目されます。

暗文土器は、当時の最高級食器である金属器を模したもので、主に都の役所や寺院で使用されました。そのため、地方ではとても貴重な品でした。当遺跡は、2 つの街道（後の中馬街道と中馬中街道）を南北に結ぶ交通の要所にあります。かつて付近に役所、または寺院があり、その関係者がこの暗文土器を持ち込んだのでしょう。たった一つの小さな遺物が語る古代の曽木、今後の調査が期待されます。

▲暗文土器
暗文とは、器の表面に施されたヘラ磨きによる文様です。
出土したものには斜放射状暗文と連弧暗文が描かれています。
0　5cm

7 国史跡元屋敷陶器窯跡

泉町久尻字下竈

▼東 1 号窯の物原

▲調査終了時（崩積土除去後）の状況

◀志野向付（溶着）

元屋敷陶器窯跡は安土桃山時代から江戸時代初頭に美濃桃山陶を生産した窯跡です。4 つの窯跡からなりますが、令和元年 10 月から令和 3 年 5 月までの間に起きた台風や集中豪雨によって複数回にわたり土砂崩れが発生した東 1 号窯南側崖地の災害復旧事業に伴う調査を行いました。

地盤が非常に危険な状態だったため、十分な考古学的調査は行えませんでしたが、崖地の堆積状況を明らかにするとともに、廃棄された窯道具を中心とする多くの遺物を得ることができました。特に東 1 号窯が営まれた最初期のものと考えられる物原を確認できたことは大きな成果でした。

8 中山 1 号窯跡

土岐津町土岐口字中山

本窯は、室町時代の山茶碗窯です。窯体の他に作業場と居住区の遺構も発見され、山茶碗生産が終盤に差し掛かった頃の様子を物語る貴重な発掘調査事例となりました。

窯体構造は、いわゆる窖窯ですが、これまでにほとんど類例の無いいくつかの特徴を持っていました。焚口に設けた石積み側壁の片側だけ取り外し式にして作業スペースを設けてあること、燃焼室から焼成室への段差（昇炎壁）が非常に高いこと、焼成室の天井を架構・補修するための柱基礎を設けていること等、大窯が発明される直前期の陶工たちによる試行錯誤の歴史を物語る貴重な窯跡といえます。

▼窯体

▲焚口前の遺物出土状況

▲製品：碗と小皿

9 林景正氏窯跡

泉町久尻字段尻巻

▼窯体：煙道の一部

▲出土遺物

▲匣鉢に刻まれた「乙塚窯」の文字

林景正氏（岐阜県重要無形文化財）は、黄瀬戸、瀬戸黒、志野、織部等の美濃桃山陶だけでなく、あらゆる美濃古陶の再現に情熱を捧げた昭和の美濃焼を代表する名陶工です。

林氏が築いた「乙塚窯」跡は、段尻巻古墳の墳丘南西端付近で発見されました。石炭を燃料とした窯で上部構造は既に失われていましたが、吸炎孔下の土坑と、その周囲を取り巻くように配された煙道等、下部構造の一部が残っていました。その他、焚口下に設けられたロストルの一部も確認できました。遺物としては「乙塚窯」と刻まれた完形の匣鉢（エンゴロ）の他、黄瀬戸、瀬戸黒等、林氏の作陶の様子をうかがい知ることのできる製品片が出土しました。

次回展示　岐阜県現代陶芸美術館サテライトミュージアム ／ 収蔵品展「美濃桃山陶」
開催期間　2022年5月21日（土）～ 8月7日（日）

関連展示　パネル展示「妻木平遺跡：祈りと信仰」（会場　土岐市役所1階多目的スペース）
開催期間　2022年3月30日（水）～ 4月14日（木）8:30～17:15　※土日休み

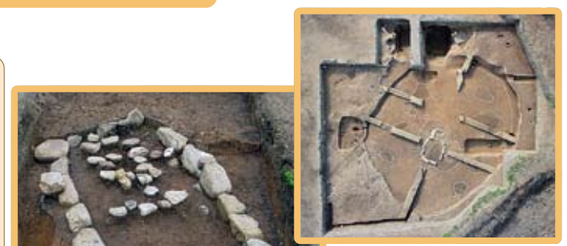
土岐市美濃陶磁歴史館　土岐市泉町久尻 1263　TEL.0572-55-1245
入館料：一般 200 円（150 円）、大学生 100 円（70 円）、高校生以下無料
障がい者手帳をお持ちの方および介助者1名まで ：一般100円、大学生50円
開館時間：10:00～16:30（入館は16:00まで）　※（　）内は 20 名以上の団体料金
休館日：月曜日、祝日の翌日

1 妻木平遺跡（つまきたいらいせき）

妻木町区画整理事業地内

Ⅰ 妻木平遺跡とは

当遺跡は土岐市南部の妻木町に位置する市内でも有数の広さを誇る遺跡です。平成 22 年度から土岐市教育委員会が主体となり、妻木南部土地区画整理事業に伴う発掘調査を行い、これまでに約 27,000 ㎡の調査を実施しました。その結果、縄文時代から近現代までの長期間にわたって、主に居住地や農地として利用されてきたことが明らかになりました。土岐市内では、これ程長期にわたる期間の遺構や遺物が確認された遺跡は他にありません。周辺には妻木城跡や妻木城士屋敷跡、いくつもの古墳跡群など、数多くの遺跡が点在し、八幡神社や崇禅寺など古くからの寺社も残るため、妻木町はもちろん、土岐市の歴史を知る上でも非常に重要な遺跡といえます。

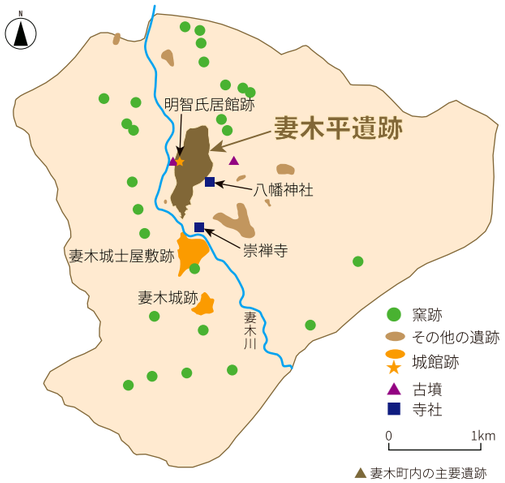


▲ 竪穴住居跡　縄文時代

◀ 古墳（横穴式石室）　古墳時代

▲ 竪穴住居跡　奈良時代

▼ 明智氏居館跡　室町時代



▲ 妻木町内の主要遺跡

Ⅱ 遺跡にみるインフラ整備

インフラとは、生活や産業の基盤となる公共設備のことです。妻木平遺跡では古代に造られた用水路がそれに該当します。古代の食生活は主に稲作に依存していたため、水田のための用水路として整備されたと考えられます。今のところ水田遺構は見つかっていませんが、自然科学分析の結果や田舟（たぶね）と思われる木製品の出土もそのことを裏付けています。用水路はその後、位置をやや変えながらも中世、近世を経て現代まで連綿と使用され続けてきました。

調査結果からは、用水路を東側の山際に沿って造り、西側に広がる平地に農地と居住地を配置した計画的なまちづくりの様子がうかがえます。また、この用水路は水田のためだけでなく生活用水や、祭祀（さいし）具を流す場所等、様々に利用されていたことが明らかとなっています。

▲ 現在の用水路と古代～近世の用水路跡

▲ 用水路跡と投棄された陶片　鎌倉時代

用水路出土の遺物

▲ 須恵器（すえき）：坏身（つきみ）　奈良時代
裏底に「万歳」の墨書

▲ 広口瓶（ひろくちへい）　平安時代

▲ 漆の付いた山茶碗　鎌倉時代

2 妻木城士屋敷跡（つまきじょうさむらいやしきあと）

妻木町字堀之内

当遺跡は、北と東を妻木川、西側を浦山谷川に挟まれた低位段丘面および緩傾斜地に立地しており、妻木城跡の麓に築かれた領主の館跡と家臣の屋敷跡で構成されます。妻木郷を治めた明智氏および妻木氏の本拠地であり、領主とその家臣が居住していた屋敷地だと考えられています。

屋敷地一帯は妻木氏宗家の断絶（1658 年）後に農地へと転用され現在に至りますが、10 次にわたる試掘調査の結果、戦国時代から江戸時代前期にかけての武家屋敷地の遺構が良好に残されていることが明らかとなってきました。一地方領主の山城と居館、そして家臣の屋敷地という一連の遺跡が良好に残る事例は全国的に見ても希少なため、非常に重要な遺跡といえます。

▲ 農地化後の石垣と武家屋敷の旧石垣
（第 10 次調査）

▼ 旧石垣の間詰石（まづめいし）と廃棄された陶器片
江戸時代（第 10 次調査）

◀ 鉄釉水指
（第 10 次調査）
安土桃山時代～江戸時代

3 浅野館跡（あさのやかたあと）

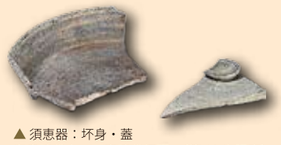
肥田浅野笠神町

浅野館は、承久（じょうきゅう）の乱（1221 年）後に土岐光行が築いた居館ですが、館そのものは未発見でした。しかし、令和 2 年の第 8 次調査において、館の堀と考えられる遺構が発見され、館の位置に関する大きな手掛かりを得ることができました。

同年の第 10 次調査では、予想だにしなかった発見もありました。奈良時代末から平安時代初頃の集落跡が発見されたのです。特に大型の掘立柱建物跡 3 棟（内 2 棟は高床式倉庫）は、当時の役所建物に相応しい規模を持ち、郷長宅（ごうちょうたく）、または郡衙別院（ぐんがべついん）（郡役所の支所）等の施設だと考えられます。古代に存在したもう一つの浅野館といってもいいでしょう。いずれも試掘のみのため、今後の追加調査が期待されます。

▲ 堀跡　鎌倉時代（第 8 次調査）

▼ 高床式倉庫の柱穴跡（第 10 次調査）
奈良時代末～平安時代初頭



▲ 須恵器：坏身・蓋
奈良時代末～平安時代初頭　（第 10 次調査）

4 上林遺跡（かみはやしいせき）

肥田町浅野字上林

平成 30 年の第 5 次調査において、古墳時代前期の竪穴（たてあな）住居跡 1 棟が発見されました。く字甕、S 字甕といった甕類の他、壺、器台、鉢等、状態の良い土師器（はじき）をはじめ砥石等も出土しました。調査範囲が限られたため、発見された建物は 1 棟だけでしたが、周辺には集落が広がっていたと考えられます。

さらに、竪穴住居跡の付近からは縄文時代晩期後半の深鉢形土器を重ねて埋めた遺構が見つかりました。これは土器を棺として利用した土器棺墓だと考えられます。これらの調査結果から、当地では少なくとも縄文時代と古墳時代に集落が営まれていたことがわかりました。市内ではこういった古い時期の集落跡の発見例が少ないため、とても貴重な遺跡といえます。

▲ 竪穴住居から出土した土師器
古墳時代
（第 5 次調査）

▼ 竪穴住居跡　古墳時代（第 5 次調査）

◀ 縄文土器：深鉢
縄文時代
（第 5 次調査）

5 国史跡乙塚古墳附段尻巻古墳（くにしせき おとつかこふん つけたり たんじりまきこふん）

泉町久尻
字勝負、段尻巻

飛鳥時代に東濃地方を治めた領主の墓である乙塚古墳は、隣接する段尻巻古墳とともに、国の史跡に指定されています。この重要な遺跡を守り伝えていくため、令和元年から保存整備事業が進められ、並行して発掘調査も行われています。

乙塚古墳（方墳）では、希少な須恵器である鳥紐蓋（とりちゅうふた）の出土や、玄室（げんしつ）内から既に失われたと考えられていた礫床（れきしょう）が発見される等の成果がありました。段尻巻古墳（円墳）では、石室入口の割れた天井石の修復を行うとともに、前庭部の調査も行われました。出土遺物はわずかでしたが、礫床が非常に良好な状態で出土しました。両古墳の整備工事は令和 4 年度中に完了し公開される予定です。※工事完了まで両古墳とも非公開です。

▲ 段尻巻古墳：前庭部礫床（第 9 次調査）

▼ 乙塚古墳：前庭部の調査（第 8 次調査）

◀ 須恵器：鳥紐蓋
飛鳥時代
（第 6 次調査）